

[国際コミュニケーション学会講演会／異文化理解教育「東南アジアと日本をつなぐ、もう一つの交差点：タイ伝統格闘技ムエタイを通じた異文化理解」 講演会記録]

タイ伝統格闘技ムエタイの歴史的変遷と ギャンブル的要素の変容

—経済成長と新型コロナウイルス感染症蔓延の経験を通じて—

The History of Thai Traditional Martial Art Muay Thai
and the Transformation of Its Gambling Elements:
Experiences under the Economic Growth and Covid-19 Pandemic

講演者

佐藤 孝也

SATO Takaya

国際ムエタイスポーツ協会日本統括代表／キング・ムエエンタープライズ代表取締役
Representative of Japan Teams, International Muaythai Sport Association

CEO King Muay Enterprises

E-mail: info@kingmuay.com

司会運営・講演会記録作成

平田 晶子

HIRATA Akiko

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: ahirata@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

Muay Thai, Thailand's traditional martial art, has been known as to the national sport of Thailand. Currently, Muay Thai events are held in several parts of Thailand and broadcast live on TV daily. There

are 1,762 Muay Thai gymnasiums throughout Thailand and more than twice the number overseas, 3,869. There are as many as 13 Muay Thai live TV programs, providing a nationwide viewing environment with over 3,000 live matches broadcast each year. So how did Muay Thai originate and evolve, and why is it still rooted in Thai society today?

Based on the concept of “understanding Muay Thai means understanding Thailand” and “knowing Muay Thai means knowing Thailand,” a special lecture titled “Another Crossroad Connecting Southeast Asia and Japan: Cross-Cultural Understanding through Muay Thai, a Traditional Thai Martial Art” was delivered on June 10, 2024, at the Convention Center, Nagoya Campus in Aichi University. At the lecture’s end, in reference to how Muay Thai has evolved with Thailand’s economic development, the audience was exposed to new phases of Muay Thai as a tourism resource for enterprises.

本報告は、2024年6月10日にコンベンションセンターにて「東南アジアと日本をつなぐ、もう一つの交差点：タイ伝統格闘技ムエタイを通じた異文化理解」と題する講演会実施時の記録である。タイの伝統格闘技ムエタイ (muay thai) は、タイの国技に相当するとも言われており、タイ歴代の王朝・政権の意向に大きく影響されてきた歴史をもつ。特に、競技スポーツとして確立されているムエタイではあるが、その成り立ちは、近隣諸国との戦争や対立においてである。さらにタイ人の多くが信仰する仏教との関わりが大きく、ムエタイの歴史はタイの歴史そのものと言っても過言ではない。更に2017年、ランシット (rangsit) 大学社会イノベーション学部准教授ラタポン・ソーンスパープ (Rattaphong Sonsuphab) 氏の調査によれば、現在タイでは各地でムエタイ興行が行われており、毎日のようにTV中継も放送されている。ムエタイジムの数はタイ全土で1,762ヶ所、海外に目を向ければその二倍を超える3,869ヶ所あるように、至るところにムエタイジムが設立されている。さらにムエタイの中継TV番組の数は、13チャンネルも提供されており、全国的な視聴環境が整備されている。LIVE中継される年間試合数は、約3,000試合を超え、さらに競技人口は数え切れないと云われるほど数多に存在する。それでは、このように今日でもタイ社会に根付いているムエタイは、どのように発生し、どのように進化してきたのだろうか。

講演会では、佐藤氏に異文化理解という観点から「ムエタイを知ればタイを理解できる」「ムエタイを知ることはタイを知ること」というコンセプトのもとに、ムエタイの起源から歴代王朝との関わり、日本の国技である大相撲との比較、そしてタイの経済発展に伴うムエタイの変化などを講演いただいた。以下は、佐藤氏による講演内容である。講演中は、実際のムエタイ選手によるエキシビションが設けられ、試合前のワイクルーの儀式を鑑賞した。本学の学生もムエタイ選手が用意したミットに対してパンチとキックなどの技を体験した。

I. ムエタイの発生起源

ムエタイの発祥起源は、タイと近隣諸国との戦争が続くなかで創りだされ、仏教寺院で継承されてきた武術にある。その後、歴代のタイ王朝とその時代背景によりムエタイが娯楽として利用され、勝敗を決めるギャンブルとして定着していった。地方のお祭りや行事などには必ずムエタイが催されることも必見である。ムエタイは、競技スポーツという側面と共に、地域や風土、国の成り立ちからタイの伝統文化としてタイに根付いたタイの国そのものを表わすといっても過言ではない。

もう少しムエタイの発祥起源の詳細をまとめると、13世紀初頭、カンボジア発祥のクメール王朝の支配から独立し、タイの“タイ族 (Tai people)”の初期国家となった「スコタイ王朝 (Sukhothai Kingdom)」のその戦時における軍事訓練のなかでムエタイは育まれてきた。当時の戦争は、銃ではなく弓や刀での戦闘が主流だった為、いわゆる“白兵戦”の機会が多く、素手による戦闘術が求められていた。それがムエタイとして発展してきた、と考えられている。特に現代のムエタイは、蹴りが重要視されるが、これは戦闘時に相手が武器を持っていた場合、より対応できるようにと長い足を使った技が発展してきたと言われている。ただし、上記の起源説には言い伝えのみで文献等が残っておらず、はっきりとしたことはわかっていない。

また、隣国カンボジアとは、ムエタイの起源をめぐる対立も起きている。直近の二国間における対立については、世界三大通信社のひとつである AFP 通信が2023年1月に配信したニュースで表面化した。タイ政府は1月24日に格闘技「ムエタイ」について、2023年5月にカンボジアで開催される東南アジア競技大会 (SEA Games) では、ムエタイをタイ語の名称ではなくカンボジア語の名称を使用する計画があることに反発し、大会をボイコットするという声明を発表した。タイ政府当局者は、同国の国技であるムエタイをカンボジアは自らの国技であるとして「クンクメール (khun khmer)」という名称を使おうとしていると非難している。一方、カンボジア政府は、世界的にはムエタイという名称の方が知られているが、競技の発祥地はカンボジアだと主張している。タイのオリンピック委員会のチャルーン・ワタナシン (Charoen Wattanasin) 副委員長は、国際オリンピック委員会 (IOC) はクンクメールという名称を承認していないと指摘した。AFPの取材に対し、「国際的な規則に違反しており、タイからのムエタイ選手の参加は見送る」と述べた。カンボジアの東南アジア競技大会組織委員会の幹部バット・チャムロン (Vath Chamroeun) 氏は、「開催国には競技名をクンクメールに変える権利がある。競技はクメール発祥で、われわれの文化だ」と、AFPに説明した。世界プロムエタイ連盟 (IFMA) のステファン・フォックス (Stephan Fox) 事務局長は AFP に対し、「柔道が空手ではないように、クンクメールはムエタイではない。似ている点はあるかもしれないが、クンクメー

ルには公認の連盟がない」と述べている。カンボジアが同大会を主催するのは初めてのことであり、ムエタイの起源をカンボジアであると主張する背景にはスポーツ業界における覇権争いの意図が見え隠れする一面があると指摘できる。

このようなムエタイの起源をめぐる二国間の対立が現代においても浮上する傍ら、タイ歴代王朝がムエタイをどのように王朝の統治に利用していたかについてまとめていきたい。

II. タイ歴代王朝とムエタイの関わり①

～アユタヤ王朝（1351年～1767年）～

2-1. アユタヤ王朝21代目サンペット2世（ナレースワン大王・1590年～1605年）

ナレースワン王（Naresuan）は、幼少期に人質として6年間ビルマ（現ミャンマー）で過ごし、その間、ビルマの武術・学術を学んだ。この頃、アユタヤ王朝（Ayutthaya Kingdom）はビルマに掌握されていたが、ナレースワン王はアユタヤの真の独立のため、ビルマで学んだ武術とスコタイ王朝時代から受け継がれている格闘術を基に兵士を鍛え上げた。この時の武術・格闘術が、古式ムエタイに発展したとされている。アユタヤ独立戦争に勝利したナレースワン王はタイの三大王のうちの1人とされ、ムエタイの創設者という意味からムエタイ選手は彼の像の前で、戦勝を祈ることもある。

アユタヤ独立戦争に勝利したナレースワン王は、いわゆるタイの三大王のうちの一人として知られており、ムエタイの創始者とタイの人びとには認識されている。これを裏付ける事実として、2007年にタイで上映された映画「キングナレースワン」の製作費は500億バーツ（日本円で約2千億円）の国費が投入されたほどである。

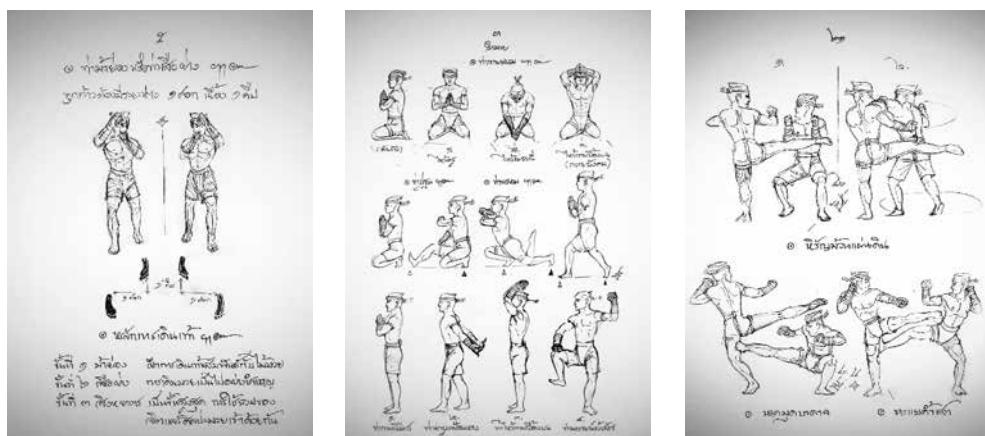


タイの旧50バーツ紙幣に描かれているナレースワン大王

2-2. アユタヤ王朝32代目サンペット8世（スア王、1703年～1709年）

このほかにムエタイが戦争近隣諸国との戦争の中で育まれてきたことを伝えることとして格闘術の伝承が挙げられる。ムエタイを格闘術として確立した人物は、アユタヤ王朝第32代目ソムデットプラサンペット8世（Somdet Phra Sanphet）である。王は別名スア王と呼ばれた。タイ語でスアとは、「虎」の意味である。スア王は、古式ムエタイで使われるメーマイ・ムエタイ（ムエタイの基本）、ルークマイ・ムエタイ（ムエタイの応用技）の格闘術を確立させ、ムエタイという優れた格闘術を後世に遺すために、その技をまとめた人物とされている。実際にスア王が後世に遺したとされるムエタイの技を記した「タムラー・ムエ（Tamla Mue）」と呼ばれる教本も証拠となる資料・文献として保存されている。

また、政府はスア王の功績を評価し、国全体で正式にムエタイの祖であることを称え、スア王が王位に即位した2月6日を「ムエタイの日」として制定した。タイ国内では2月6日にお祭りイベントが開催されている。たとえば、2023年2月6日には、タイ南部フアヒン（Hua Hin）のリゾート観光地でタイ陸軍が主導し、政府観光庁とスポーツ庁タイ文化庁がアメージング・タイフェスティバルという大規模なイベントを開催した。ムエタイの試合前に行うワイクルー（Wai Khru）という先師崇拝の祈りを捧げるために、参加者5千人で踊るというギネス記録を作ろうという壮大な試みが行われた。ギネス記録にも認定されるほど、スア王即位日である2月6日はタイ政府関係者にとっても重要な日であることがわかる。



スア王が遺したとされるムエタイの技を記した文献「タムラー・ムエ」

2-3. アユタヤ王朝、「ムエタイの父」ナイ・カノム・トムの伝説

最後はアユタヤ王朝末期の歴史に登場するムエタイの父として知られる、ナイ・カノム・トム（Nai Khanom Tom）について述べる。下記に提示した写真は、どれもが現在で

も実際に販売されている書籍の表紙である。右側の書籍カバーは、タイの小学校5年生が実際の授業で教わる教科書である。そこに記載されている一部を読みたい。

「1767年アユタヤ王朝はビルマ（現ミャンマー）の侵攻を受け、同年3月17日に首都アユタヤは陥落。ムエタイが強いことで有名だったナイ・カノム・トムも他の民衆と共に捕虜となってしまいました。ビルマの王はこの戦争でムエタイはタイ人が一番強いという事を知り、自分の目の前でムエタイの試合を観たいと言いました。そして王様は、「タイで一番強い選手を出せ！」と命令しました。

当時、ナイ・カノム・トムがタイで一番強かったのですが、その時の試合の条件は、彼一人とミャンマーの選手10人との試合でした。彼が勝てば、自由にさせてもらえ、欲しいのを全て与えて貰えるが、もし、負ければ首を切るという条件でした。それを聞いた彼は、逃げる事も出来ず、とても動揺しました。

ナイ・カノム・トムは、自分の気持ちを落ち着かせる時間をかせぐ為に、王様をお願いしました。

「タイ国には、神様を守り、自分の親を守り、ムエタイを教えて頂いた先生を守り敬う習慣があります。だからお祈りの踊り（ワイクルー）を踊る時間を私に頂けないか？」と。

王様はそれを許し、ナイ・カノム・トムは一人踊りました。「神様！お父さん、お母さん、先生、この試合に負けたらお許してください」そして彼は、気持ちが大きくなる様に、落ち着く様、踊りながらまわりの地形を覚え、作戦を練り踊りました。

そして踊りが終わった後、10人のミャンマー人と戦い、ナイ・カノム・トムは見事勝利したのです。

この出来事が起きてからは、ムエタイの試合の前に、ワイクルーを踊る事が習慣になりました。そして毎年3月17日は、ワンムエタイ（ムエタイの日）と呼ばれ、タイ人は誰でも、ナイ・カノム・トムをムエタイの偉大な先生だと言う事を知っています」

歴史の教科書に記載されたナイ・カノム・トムが行ったワイクルーについては、ムエタイだけではなく、タイ国内の様々な武術や舞踊に励む者たちであれば必ず試合や公演の前に行う儀式ともなった。このことは、ワイクルーがこうした教育の場における教本の訓えとともに根づいていることを示唆している。



実際にタイで販売されているナイ・カノム・トムを描いた書籍の数々

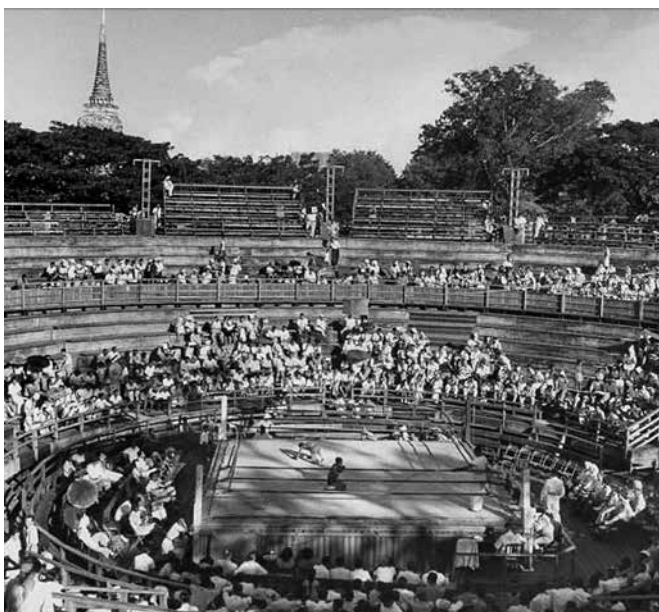
III. タイ歴代王朝とムエタイの関わり②

～トンブリー王朝(1767～1782)からチャックリー王朝(1782～現在)まで～

18世紀から20世紀初頭になると東南アジアは、西欧列強の脅威に晒される時代に突入していった。例えば、オランダは19世紀にジャワ島を支配し、強制栽培制度を導入した。イギリスは、マレー半島やビルマに進出し、スペインはフィリピンへ、そしてフランスもベトナム、カンボジア、ラオスに進出しながら、植民地支配領土を拡大していった。このように東南アジア地域の諸各国が西欧列強の植民地支配により征服されていく一方で、タイ（当時はシャム）だけが一部の領土を除き、西欧列強による植民地化から支配をされずに独立を守り抜いていった。その一つの要因には、タイという国が近代化を図ることで西欧列強による植民地化の支配から自国を守り抜いた歴史が挙げられる。タイの近代化の過程で中央政府は、ナショナリズムの高揚を巧みに図り、ムエタイもこのタイのナショナリズムに利用された歴史をもつ。

ここでは、18世紀～20世紀初頭に東南アジアが西欧列強の脅威にさらされた時代において近代化の道を歩んだタイがムエタイをどのように利用しながら、またムエタイを発展させてきたかを明らかにする。当時のシャムは、ナショナリズムを鼓舞する必要に迫られていた。「チャックリー改革 (Chakri Reformation)」で名高いラーマ5世 (King Rama V) が指揮を執る当時の中央政府は、ムエタイの価値を認め、軍施設などでのムエタイの試合を盛んに開催することで振興策を図ったことで知られる。

その後、ルールの制定やスタジアムの建設、階級制の導入など、ワイクルーと共に伝統



1945年初めてのムエタイ・スタジアム
『ラーチャダムヌーン・スタジアム』が設立された

文化としてのムエタイを保持・奨励し、品格高い民族であることを外国へアピールするためにムエタイは大いに役立った。中でも、1945年に初めてムエタイ・スタジアム「ラーチャダムヌーン・スタジアム (Rajadamnern Stadium)」が設立されたことは特筆すべきことである。当時の中央政府がタイ人は品格の高い、勇猛果敢な民族であることを対外的にアピールする上で有効的であると判断していたことは言うまでもない。

ここでアユタヤ王朝時代、トンブリー王朝、そして現代のチャックリー王朝に至るまでのムエタイの歴史をまとめると、ムエタイは近隣諸国との戦争や西欧列強からの侵略行為が続く中で姿や形を変えながらも、タイという国のために役立ってきたことがわかる。

IV. 日本の国技である大相撲との比較

ここからは、具体的にムエタイと大相撲を比較しながら、数多くの共通点と相違点について述べる。

4-1. 国技との位置づけ

タイのムエタイも日本の大相撲も、概して「国技」である、またはそれに相当すると位置づけられているが、事実上の法令などで制定されているわけではない。昔からの慣習であることから、国技に相当すると言われている。ムエタイよりも、タイでは国技に相当す

ると考えられている種目がもう一つある。それは、セパタクローである。手を使わず、足で行う、いわゆるバレーボールのような種目が、タイの国技に相当すると言われている。もちろん、セパタクローも法令や法律等で国技と定められたものではないが、いずれもが昔からタイ社会に根付いている文化という意味で「国技」と位置付けられてきた。

4-2. 装飾品

続いては、装飾品である。ムエタイの選手の映像を見ると頭につけている輪っかが目に入ってくる。これは、タイ語でモンコン (mongkhon) と呼ばれるもので、実はお守りとしての機能をもっている。下記の写真でも示した通り、試合のリングに上がる前に師匠につけてもらい、ワイクルー (戦いの舞い) を行ったあと、再び師匠により外される。外すことにより「戦いの神様が解放され幸運をもたらす」と言われている。寺院で僧侶から祈祷を受けた非常に神聖なもので、常に上部に置いておかないといけないとされている。もし下方に置くと、お守りとしての効果が弱まると信じられている。更にこの信仰は、身体動作にも影響する。たとえば、選手がモンコンをつけてリングに入場する際、リングの四方に張られたロープの上を跨ぐかたちで選手は入らなければならない。ロープの下をくぐってリングに入る所作はタブーである。試合中は当然モンコンを頭から外すことになっているが、リングの支柱の高い上方に掛けておく。モンコンは、ムエタイの試合で必ず目にするができるが、非常に神聖なものであり、重要な装飾品の一つとして見られるものである。大相撲と比較すると力士が髪を伸ばして髷を結う行為や取組前に丁髷を結い上げることに相当する。



★モンコン (頭に装着するお守り)

★パーブラジアット (腕に装着するお守り)

この他にムエタイの選手が腕につけているパープラジァット (phab raiat) と呼ばれるお守りも重要な装飾品である。布や紐を編み込んだもので、以前は僧侶が着用していた袈裟をもらい作っていたといわれている。モンコンとは違い試合中も着用しているため、彼らをリングの上で支えるサポーターの役割も果たしていると考えることができる。

4-3. 土俵入りとワイクルー

続いては土俵入りとワイクルーである。大相撲の力士は土俵に上がる際、横綱であれば横綱土俵入りのエリアが設けられる。横綱の土俵入りでは、まず呼出が柝を鳴らしながら先導し、呼出・行司・露払い・横綱・太刀持ちの5人が順に入場するなど、荘厳に儀式が執り行われる。同様にムエタイの選手も必ずリングに上がる時にワイクルーと呼ばれる奉納舞踊を捧げることになっている。大相撲における土俵と考えると、ムエタイのリングも立派な神聖な場所である。神聖なリングの上にあがり、ムエタイの選手がワイクルーの奉納舞踊をする前に、三つの言葉を必ず唱える。一つ目は「プツラクサー (仏を守る)」、二つ目は「タンマラクサー (法を守る)」、三つ目は「サンカラクサー (僧を守る)」である。つまり、仏教の教えにある三宝を篤く敬い、この呪文を唱えて加護を祈りながら、リングに上がっていく。ワイクルーの奉納舞踊は、先生、師匠に感謝を表し、勝利を祈るという意味がある。踊り方には、闘う相手に対して弓を打ち、相手を威嚇するという意味をもつ舞のほか、刀で切りつける踊りもパフォーマンスとして行ったりもする。現在のムエタイ選手が披露するワイクルーの奉納舞踊の型には、手榴弾を投げたり、機関銃を打ったりするなど、神聖なものであることは変わらないが、時代によって多種多様な踊り方が創り出されてきたりもしている。そのほかには、その選手の出身ジムの歴史や地方を代表する動物や踊りなどを表現した型などもあり、個性豊かなワイクルーは見所が実は知れば知るほど見つかる。

ワイクルーは試合の前に必ず踊らなければいけない。少し昔の話であるが、強い外国人選手がタイ人選手とタイトルマッチを組んだ時に外国人選手だということでワイクルーを踊らなかったことがあった。その試合で外国人選手は勝ったが、タイトルマッチということでワイクルーを踊らなかったことによって勝ったにもかかわらず、ベルトを剥奪されたという厳しい結果も出るほど、ワイクルーはムエタイで重要な位置づけである。

4-4. トレーニング方法

続いては、トレーニング方法である。日本の大相撲力士の一日の生活は朝起き、すぐに稽古が開始する。その後、食事して、昼寝をするというパターンである。トレーニングと食事と休息という3つのサイクルが、実は力士としての身体を作るために非常に有効的であると考えられている。このパターンは、実はムエタイも同様である。タイのムエタイ選

手たちも、朝起きて、まずは道を走ってトレーニングを開始する。その後にみんなで食事して昼寝をする。ムエタイ選手は、ごろごろしながらも、夕方には起きて、同じようなサイクルでトレーニングをし、食事をして、夜になれば寝るというパターンを一日二回繰り返す。大相撲の力士もムエタイの選手も、このような練習方法で強靱な身体を作っていく。タイと日本は遠く離れているが、実はトレーニング方法は共通する点があった。

以上まとめてきたように、装飾品、土俵入り、トレーニング方法と、多くの共通点がムエタイと大相撲にはある一方で大きく違う点が実は一つある。それは、社会的地位である。例えば、この会場に今、日本の大相撲の横綱が登壇した場合、当然多くのみなさんは拍手で迎えてくれることであろう。TVに出てくる有名人であれば、「写真を撮ってください」「サインください」という賑やかな雰囲気会場は一変する。同じような状況をタイのムエタイの場合で想像してみたい。今ここに、チャンピオンが来ました。そのとき、会場の人びとは「写真を撮ってください」「サインください」とは実はならない。なぜなら、ムエタイは実は社会的地位の低いスポーツであると見做されているためである。

V. タイの経済発展に伴うムエタイの変化

5-1. ムエタイとギャンブルの関わり

タイ人にとってムエタイは、サッカーの「the pools」（イギリス）、「トトカルチョ」（イタリア）、「スポーツ振興くじ」（日本）のように勝敗を予想するギャンブルである。タイで合法的に賭博を行うことができるのは、タイの競馬とムエタイとされている。ムエタイもスタジアムが特別に許可を得てギャンブルを行っている。スタジアムを一步外に出してしまうと、違法なギャンブルと扱われる。

しかし、2017年タイ賭博問題研究センターが主催したセミナーでランシット大学准教授・ラタポン・ソーンスパープ氏は、ムエタイとギャンブルの関係について次のように述べている。「ムエタイ賭博に関しては、年間400億から500億バーツが動くとされている。認定スタジアムと、政府が特別に許可を出したスタジアム内では、ムエタイを対象に賭けをすることが許されている。合法賭博に関しては、年間130億バーツから140億バーツが動いている。また、ムアイトゥー（※棚＝タワーの中のムエタイ、テレビを見ながらムエタイの試合に賭けること）など、電話やオンラインを利用した違法賭博で、280億バーツから360億バーツが動く」とされている。ラタポン助教授の説明からも分かるように、ムエタイ・スタジアムのタイ人来場者はほとんどがギャンブラーで、判定が賭けの動きに流されることもあるため、外国人にわかりにくくガラパゴス化していることも深刻な問題となっている。実際にムエタイの勝敗の判定は、実際にオフライン・オンラインでの賭け値の変動に左右されやすいという弊害が起きている。ムエタイやボクシングのプロの世界で

生きる人間の目でムエタイの試合を観戦していると、「あれ？こっち勝ったんじゃないの？」「え？これ負けなの？」と困惑する場面は多々ある。この理由は、選手自身の技能による勝敗決めとはかけ離れた、ギャンブルの影響によると理解できる。その試合の勝敗にたくさん賭けてくれた人の方に判定が流れたりすることは、実はムエタイには多々ある。つまり、私たち外国人から観ていると、この判定は一体間違っているのか正しいのかわからないことがでてくるが、判定そのものは分かりにくく、いわゆるガラパコス化している状況である。

5-2. ギャンブルであることの機能的側面

試合の勝敗がギャンブルによって不可解ではあるものの、当然ギャンブルということで社会的に受け入れられにくいものではある一方で、ギャンブルであるがゆえに保たれる部分が実はあったりする。

まず一つ目は、マッチメイクの公平性である。あのムエタイの試合の場合、ギャンブルが成立することが重要になってくる。どちらが勝つか負けるかはっきりしていたら、ギャンブラーは勝つと見込まれている選手に賭けてしまい、賭け事として成立しない。換言すると、マッチメイクが、どちらの選手が勝つかわからない状態に持っていくのが、いわゆるプロモーターの力ということになる。この選手を勝たせるマッチメイクだとか、あの選手を負けさせるためのマッチメイクという対戦のシナリオは実は存在せず、マッチメイクの公平性が、ギャンブルがあることによって保たれているというロジックである。

二つ目は、八百長試合や無気力試合に対する厳しい措置をとることである。相撲でも昔、無気力相撲に対して措置が取られたことがあった。八百長試合や無気力試合に対する厳しい措置は、当然ギャンブルが関わってくるため、あからさまにこの選手を絶対に勝たせようということとはできないことになる。試合をしている選手が、中盤から調子がおかしい、動きがいつもと違う、怪しいと判断した時に、写真で示した通り、レフリーが選手のリングからの追放を宣言するドーン・ライロンは今もよくある話である。レフリーの判断によってリングから追放された選手は、実はこの後、非常に厳しい取り調べが待っており、八百長が発覚した場合、タイの法律によって逮捕される。八百長や無気力試合に対しては、ギャンブルがあるがゆえに厳しい措置が取られている。

三つ目は、ギャンブラーからのチップが選手の大きな収入源となっている点である。選手が試合をすれば、当然ファイトマネーは得られる。しかし、それ以上に、例えば自分にかけてくれたギャンブラーが勝ったら、その得たお金を、その選手に渡したりすることがあり、これが大きな収入源となっている。

四つ目は、先ほどのマッチメイクの公平性につながるが、実力差が認められればレフリーが試合を止めてしまうことがあり、このことが安全性も担保されるということであ

る。もうこれ以上戦わなくても負けは決定されているような、一方的な試合の場合はレフリーが試合が途中で中断することがよくある。負けている方の選手にとってみれば、悔しい面もあるが、とどめを刺されることがないため、選手の安全性というものは、実はギャンブルによって担保されている部分がある。

ここで先ほど述べた日本の大相撲の横綱とタイのチャンピオンの社会的地位が違う点に話を戻すと、先ずもってムエタイがギャンブルと共に存在していること自体がタイの人たちからすると、下に見られる風潮を作りだしていると言える。それに伴い、タイの東北地方出身の選手が実はムエタイ選手の出身地の中でも最も多い。タイの東北地方は貧しい地域とタイの人びとの間では認識されており、その貧しい地方からムエタイの選手がたくさん輩出されている。

タイの社会情勢に関わるが、つい最近までタイは相続税がなかったが、2016年に相続税が導入された。近年まで相続税がなかった社会では、所得のいわゆる再配分の機能が働いてなかったことを意味する。いわゆる裕福な層の人たちは、生涯裕福であり、他方で東北地方の貧しい地域出身の人たちは、ずっと貧しい状態であり、教育の格差も広がる。そういった東北地方の貧しい人たちは、お金を得るために、何が最善であるかを考えた時、実はムエタイのチャンピオンになることが、収入を得る大きな手段となっていた。東北地方でムエタイの修行を重ね、首都バンコクに来てチャンピオンになってお金を稼ぐことは、いわゆるタイの東北地方の人たちにとってタイランド・ドリームと言われる状態であった。もちろん、現在もこのタイランド・ドリームは色褪せることはない。

6. 仏教とギャンブルについて

ここでギャンブルに関して一つ疑問が生じるかもしれない。タイは、いわゆる仏教国である。ところが、仏教国であるにもかかわらず、ギャンブルは認められているという矛盾に対して疑問が湧いてくるのではないだろうか。国民の九割以上は、仏教徒であるにもかかわらず、ギャンブルに関しては、比較的実質は寛容である。その理由には、上座仏教の教えでもある、タンブンという概念が存在している。タンブンは、徳を積む行為のこと、タンブンと言う言葉は広義には人や動物を助けたりする行為が含まれるが、狭義には寺院や僧への寄付を意味する。タンブンの観念は輪廻転生の思想が影響している。

世界価値観調査（宗教や道徳などを対象とした国際比較調査）によると、タイ人の約6割以上は宗教の意義は「他人のために善行をする」と回答している。つまりギャンブルで得たお金であっても他人のために使うならば良い、という考え方のもとで生きている。すなわち、ギャンブルで得たお金であっても、それを貧しい地域から出てきたムエタイの選手のチップとして渡し、その選手の暮らしがより良くなるために掛け金を払う行為を人のために良い行いをすると読み替えているといえる。お金を使えば、ギャンブルで

も構わないという考え方が、タンブン行為に応用され、ムエタイ選手が活躍する試合と関係するギャンブルにお金を払うことを躊躇わないということである。

7. グローバルコンテンツとしてのムエタイ

アユタヤ王朝に起源をもち、タイの歴史と社会のなかで育まれてきたムエタイは、これからグローバルなコンテンツとしての発展が見込まれている。2020年3月6日、バンコクのルンピニー・スタジアム（Lumphinee Stadium）という大きなスタジアムで大規模興行が開かれた際、新型コロナウイルスの集団感染が発生した。これは、タイで初めての集団感染の事例となった。ルンピニー・スタジアムは、陸軍の管理施設であったため、時の首相プラユット氏が率いる軍政への批判と共に、ムエタイやそれに伴うギャンブルへも大きな批判が向けられた。

そのコロナの流行に伴って、2023年にルンピニー・スタジアムは、長期的に閉鎖し、その後続いた無観客試合を経て、これまでの慣習を排除した格闘技イベント「ONE」と提携し、2022年ラージャダムヌーン・スタジアムは同じくギャンブルを排除したエンターテイメント興行「RWS」を実施した。本来、格闘技イベント「ONE」は、シンガポール発祥のイベントであるが、シンガポールと提携し、ギャンブルを一切行わない興行型ムエタイを現在も続けている。一番最初に設立されたムエタイのスタジアム、ラージャダムヌーン・スタジアムも、ギャンブルを廃止したエンターテイメント興行型ラージャダムナンワールドシリーズという興行を実施している。タイのムエタイは、コロナ禍下にギャンブルから決別したイベント興行を切り拓き、新たな道を歩み始めている。

さらにプラユット首相は、このコロナ禍で落ち込んだ外国人観光客を呼び込むため、国家ソフトパワー開発委員会（NSPDC）を発足させ、ムエタイも「5F」に位置づけられている。「5F」とは、フード（Food）、映画（Film）、ファッション（Fashion）、格闘技（Fighting）、祝祭（Festival）である。ムエタイは貧困層のスポーツであり、ギャンブルも伴って社会的に受け入れられない風潮があった。しかし、コロナ禍を経て、ムエタイは変貌を遂げ、今や観光資源コンテンツとして扱われるようになった。これまで社会的地位が低かったムエタイもタイを代表するコンテンツとして再認識され、ギャンブルを廃止した世界基準の競技（New Eraのムエタイ）として進化を遂げる一方、地方などで行われている伝統的なムエタイと二極分化している。

【参考文献】

菱田慶文 2014年 『ムエタイの世界—ギャンブル化変容の体験的考察』東京：めこん